

# 原子力発電所事故後の長期避難から帰還後の コミュニティ復興に活用可能な ソーシャル・キャピタル

## Utilization of social capital for community reconstruction returned after long-term evacuation by the nuclear power plant accident

木立 るり子<sup>1, †</sup> 山田 基矢<sup>1</sup>

清水 真由美<sup>2</sup> 菊池 和貴<sup>2</sup>

Ruriko KIDACHI<sup>1, †</sup> Motoya YAMADA<sup>1</sup>  
Mayumi SHIMIZU<sup>2</sup> Kazutaka KIKUCHI<sup>2</sup>

キーワード：ソーシャル・キャピタル、コミュニティ、復興、原子力発電所事故  
Key words : social capital, community, reconstruction, nuclear power plant accident

要旨：原子力発電所の事故後に長期避難を経て帰還したX町住民3名の語りから、コミュニティ復興に活用可能なソーシャル・キャピタルを導くことを目的とした。帰還したX町に居住している3名を対象に半構造化面接法で実施、得られたデータを抽象化しカテゴリーを導いた。X町住民のソーシャル・キャピタルとして、日本の旧来の人間関係づくりと互助のカテゴリーが【旧来は行政区、班、隣組のつながりで密着していた】として得られた。歴史文化的な【歴史的にヨソ者を受け入れてきた】【基本的に地域への愛着がある】の共存が、コミュニティ復興には強みとなる相補のソーシャル・キャピタルとして抽出された。帰還後の状況を示すカテゴリーとして【居住者がつながる集会ができていく】が抽出された。ヨソ者を排除しないという資源は、地域への愛着と一緒にあって、結束の強いネットワークの弱点を補完し、コミュニティ復興には強みとなることが示唆された。

This study aims to derive categories of social capital that can be utilized for community reconstruction in the case of "X" town, where people returned after a long-term evacuation by the nuclear power plant accident. Three people who returned to "X" town agreed to cooperate for research and responded to a semi-structured interview. The narrative data were translated into text and categorized by qualitative analysis as: 1) the traditional administrative districts, or smaller group, or smaller Tonarigumi between neighboring groups that were closely connected; 2) historically accepted strangers; 3) there is an attachment to the area; and 4) returned residents held gatherings that could be connected. The social capital of not excluding strangers is synergistic with the social capital of attachment to the area. This complements the weaknesses that tend to occur in networks with strong cohesive forces. It was suggested that the extracted categories are factors that can be utilized for community reconstruction.

1 弘前大学大学院保健学研究科 Hirosaki University Graduate School of Health Sciences

2 弘前大学被ばく医療総合研究所 Hirosaki University Institute of Radiation Emergency Medicine

† 連絡先：木立るり子 (kidachi@hirosaki-u.ac.jp)

## I. はじめに

2011年の福島第一原子力発電所事故に伴い、周辺の11市町村に避難指示が発出された。被災者らは自分たちが望んだわけではないのに、それまで住み慣れた地、馴染んだコミュニティから離れて、知り合いがほとんどいない避難先で新たな対人関係を構築しなければならなかった。仮設住宅で孤立する人たちに関する報道や<sup>1,2)</sup>、災害復興公営住宅への移動が進んでからも、周囲とのかかわりを持って孤立している人たちへの懸念が報道されている<sup>3)</sup>ことから、避難に伴う新たな関係づくりの負担が大きかったと伺える。

避難先においてだけでなく、避難指示が解除されたあと住民が元の地に戻ったからといって、コミュニティが被災前と同じ状況に戻るわけではない。福島県X町では、全町避難から6年後に避難指示が一部解除されたが、放射線の影響や原子力発電所への懸念、避難先で新たな生活を構築したなどの理由から、元の地に戻る人はまばらである<sup>4)</sup>ことが報告されている。そのため、帰還した後、従前の近所づきあいがあまりなく、そのまま人との交流がなければ孤独を感じ、精神的に好ましくないだろう。避難指示解除後の居住者には高齢者が多く<sup>5)</sup>、高齢になって新たな関係づくりをしていくことの負担も大きいと考えられる。

避難指示が解除された自治体において、国や県、NPO団体、大学等による支援活動によりコミュニティ活性化が進められているなかで、Y大学は、災害発生後にX町との連携を締結し、被ばく線量把握に関する支援や、町の復興にむけて住民の安心・安全に寄与する支援を積極的に展開してきた。住民とともにコミュニティ復興を目指した活動を進めるうえでは、支援する側の一方的なやり方ではなく、コミュニティづくりに関係する人とのつながり方や社会参加の傾向、地域への思い・信頼などの特徴を知り、住民に寄り添って行うことが双方にとって良いと考え、X町のソーシャル・キャピタルを確認することとした。

先行研究では、災害後の被災地域のレジリエンスにソーシャル・キャピタルが深く関わっていることが証明されている<sup>6)</sup>。また、高齢社会との関連では、地域保健対策の推進に関する基本的な指針において厚生労働省が、ソーシャル・キャピタルの活用・醸成<sup>7,8)</sup>、および、人材の育成等の推進のための研究

を推進してきている<sup>9)</sup>。しかしながら、長期避難から帰還後のコミュニティ復興におけるソーシャル・キャピタル活用に関する研究はまだ見あたらない。コミュニティ復興を支援するにあたり、元々居住していた人たちのソーシャル・キャピタルを明確にして支援する側と共有する意義があると考えられた。

## II. 研究目的

原子力発電所の事故後に長期避難を経て帰還したX町住民3名の語りから、コミュニティ復興に活用可能なソーシャル・キャピタルを導くことを目的とした。

## III. 用語の定義

ソーシャル・キャピタルは、社会学、政治学、経済学、経営学などにおいて古くから用いられてきている。ソーシャル・キャピタルの定義について一般的な合意が成立しているわけではなく<sup>10)</sup>、米国の政治学者Putnam<sup>11)</sup>による、「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」という定義が用いられることが多い。この定義に則りつつ、本研究におけるソーシャル・キャピタルは、「X町住民の社会的ネットワークと地域に対する態度の特徴であり、コミュニティ復興が効率的に行われるための資源」ととらえた。

また、「地域」の用語は多義的な概念であり、「コミュニティ」の定義も立場により異なるものである<sup>12)</sup>とされている。本研究では、協力者の発言もあわせて考え、地域とコミュニティは境界があるような距離の概念でなく、住民相互の交流が行われているコミュニティであり、政治・経済・教育等との関連も含むより総体的なものが地域であるにとらえた。協力者の発言にある地区は、何らかの区画が設けられて区切られた範囲（行政区、町内会など）を指している。

## IV. 研究方法

### 1. 研究協力者

X町に居住し、研究協力を同意した3名が研究協力者である。X町役場の大学の支援に関する窓口担当課に研究の目的、方法、倫理的配慮等について説明し、同意を得た後に研究協力者3名を推薦してもらった。推薦にあたっては、住民のことを良く知っ

ていて従前からの住民とかかわりが強い人、という以外は条件を設けていない。推薦された3名には研究者が直接連絡し、日時、場所等の打ち合わせ後に訪問し、口頭と文書による説明の後、協力同意を得てから実施した。

## 2. 調査方法

ソーシャル・キャピタルを測る指標は既存のものや開発中のもの<sup>13)</sup>があり一定ではない。本研究は、震災以降頻繁に行われてきたアンケートに住民がネガティブな思いを持っているという声に配慮し、個別の半構造化面接法により行った。「あなたがX町でこれまでさまざまな活動を行い町民とかかわってきたなかで、X町の人々について感じていることを全体的傾向、あるいは個別な例を通してお聞かせください」と依頼した。決まった測定指標があるわけではないため、インタビューガイドは、ソーシャル・キャピタルの構成要素を参考に、コミュニティ復興に関係する社会参加、社会的ネットワーク、地域への愛着などを問うこととし、政策に関する考えは、原発への賛否につながる可能性があることから含めなかった。①X町の人々の従前からの余暇活動や地域活動への参加状況、②X町の人々の従前からの近所づきあい、③X町の人々の従前からの助け合いや人への信頼など、④X町の人々の従前からの地域への思いや愛着、問題意識の持ち方など、各項目について自由に語ってもらった。インタビューは複数の研究者3名で訪問し、面接時間は3件ともほぼ1時間であった。

## 3. 調査期間

2019年9月に調査した。

## 4. 分析方法

協力者の許可を得てからインタビュー内容をICレコーダーに録音し、得られた録音データから逐語録を作成した。語られた内容の意味を損ねないように一つの意味単位に分けて切片化した最小単位のデータに人とのつながり方などの解釈でコーディングし、共通性と差異に基づきサブカテゴリー、カテゴリーへと抽象化した。協力者の属性や仕事に関する内容などの、住民のソーシャル・キャピタルに関係しない対象者の属性データは最終的に除いた。カテゴリー化のプロセスでは、質的研究歴がある研究

者2名を含む研究者間でカテゴリーの妥当性を確認しつつ分析することで、信用妥当性の確保に努めた。

## 5. 倫理的配慮

著者が所属する大学の倫理審査委員会の承諾を得た(整理番号:2019-020)。協力者には、調査時に、録音を含め、秘密の厳守と匿名性、協力および撤回・辞退の自由を伝え、署名による同意を得たうえで実施した。

## V. 結果

### 1. 協力者の概要

X町に居住し、住民自治組織の代表的立場にあるA氏70代前半の男性、住民支援の機関で働くB氏50代後半男性、C氏60代前半女性であった。

### 2. X町のソーシャル・キャピタル分析結果

切片化した196のデータから45のコード、13のサブカテゴリー、4つのカテゴリーが抽出された。X町住民のソーシャル・キャピタルとして、【旧来の行政区、班、隣組のつながりが密着していた】、【歴史的にヨソ者を受け入れてきた】、【基本的に地域への愛着がある】、【居住者がつながる集会ができている】の4つのカテゴリーが抽出された(表1)。カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》、語り例は、〈 〉で示す。

#### 1) カテゴリー1【旧来の行政区、班、隣組のつながりが密着していた】

旧来のX町の人々の社会的ネットワークを示すカテゴリーで、4つのサブカテゴリーで構成された。震災前から某区の代表の立場で住民とかかわりがあったA氏の語りが多くを占めた。

《旧来の地区のつながりは団結していた》は、社会参加に関するサブカテゴリーである。祭りや運動会での地区ごとの団結のことや、農業地区か商業地区かによって集まり方は違うが共同作業などで人々が結束していたという語りであった。

〈農村区域って皆さん協同して作業しないと出来ないことがいっぱいあった。田植えにしろ、稲刈りにしろ、農作業ってほとんどみなさん助け合ってた。逆にこの地区(商業地区のこと)って田んぼ、畑が無いんで、コミュニティの作り方が違うんですよ。だから今でも、戻って来た人で

表 1. 3名の語りから導かれたX町のソーシャル・キャピタルに関するカテゴリー一覧

カテゴリー	サブカテゴリー (データ数)	コード	協力者別データ数		
			A	B	C
1 旧来は行政区、班、隣組のつながりで密着していた	旧来の地区のつながりは団結していた (35)	旧来は地区や組で祭りや運動会に参加し団結していた	9	4	2
		祭りや法事などでは隣近所や隣組を越えたつながりで団結してきた	1	0	1
		農村地区出身は田畑の共同作業だったことが集まりやすさに表れる	2	0	2
		商業地区出身者は地区のイベント等で団結していた	5	0	0
		長い歴史の中でできた付き合い方のルールや余暇の過ごし方を基盤にしたコミュニティが地区で成り立っていた	3	0	6
	旧来の隣組は互いに信頼してオープンな付き合いだった (19)	旧来の隣組とのつながりは自由に行き来できてオープンだった	8	0	1
		旧来の隣組では互いの家の個人情報を知って信頼し合っていた家の境界がないことが隣近所との付き合い方に表れる	5	2	0
	地区の情報を掌握し信頼される立場の人がいた (9)	地区の住民の情報をもち、地区住民から信頼される長という立場の人がいた	7	0	0
		困ったときに頼れる人がどこかにいると思う	2	0	0
	世代によって旧来の付き合い方と違う (10)	旧来より新しい人たちの通りは隣との境界が明確で近所の付き合い方にも表れる	3	0	0
若い人はその世代のつながり方だ		1	3	1	
若い人にはその世代の助け合いの仕方がある		0	0	2	
2 歴史的にヨソ者を受け入れてきた	入植者と町をつくってきた (4)	江戸末期の飢饉で人がいなくなった時に他から入ってくる人で町ができた	1	0	0
		藩の領土争いに敗れて他から人が入ってきた	1	0	0
		原発の作業員が全国から集ってきていた	2	0	0
	他県から来た人を町の一人として受け入れる (16)	他県から来た若者の農業をやりたいという所望に応じている	4	0	1
		他県から来た人を受け入れた復興もありと思う人柄に惹かれて町に住むことを決めた人もいる人が町に住むことが復興だと考える	4	0	0
3 基本的に地域への愛着がある	居住者は地域への愛着がある (22)	愛着があるが故に戻る	2	1	4
		高齢者は特に町で暮らしたい思いがある	1	2	1
		生活が不便でも町に戻りたいという思いがある	2	2	0
		居住者は土地と墓を守る意識が強い	0	2	0
		高齢者は開拓者が多いため特に地域に思いがある	0	0	2
		愛着と復興がつながっていると思う	2	0	0
	町のために何とかしたいと思っている (10)	避難先に馴染めずに戻る人もいる	1	0	0
		町に必要なものや地域の問題について、真剣に考える	0	1	4
	町のために本気で取り組むという思いがある	町のために本気で取り組むという思いがある	0	0	5
		地域に愛着があっても戻れない人たちがいる (12)	戻りたい思いはあるが加齢による身体機能の低下で生活が自立しないために戻れない	0	0
戻りたい思いはあるが働く場所がなく戻れない	戻りたい思いがあったが避難生活が長く、避難先に生活基盤ができて戻れない	0	0	1	
	戻りたい思いがあったが避難生活が長く、避難先に生活基盤ができて戻れない	2	2	2	
戻らない人には放射線が理由になる (6)	放射能への恐怖の意識から帰還をためらう	3	0	0	
	被災者自身で農作物や町へ風評を作る	3	0	0	
4 居住者がつながる集会ができている	複数の交流の会でつながりができている (22)	同じ仮設でできた友人たちと帰還し、つながりが継続されてる	0	3	0
		サロンでできたつながりが強い絆になってる人もいる	0	5	2
		友人同士声をかけあいサロンなどの活動に参加している	0	5	4
		居住者が交流の場を自分たちで作りはじめている	0	0	3
	居住者同士が知り合った先に気遣い気配りが生まれる (13)	居住者で名前を覚えたり声をかけて知り合うことから気遣い気配りが生まれると思う	8	0	1
復興公営住宅で料理のおすそ分けの光景が見られ始めている	復興公営住宅で料理のおすそ分けの光景が見られ始めている	0	0	4	
信頼や人とのつながり方に個人の選択がある (18)	誰とも交流を持たずに孤立する人がいる	支援員の関わりを拒む人もいる	3	0	4
		交流の場に参加するのが嫌いでも茶飲み話なら良いという人もいる	2	0	2
	特定のサロンのみ参加する人もいる	特定のサロンのみ参加する人もいる	4	0	0
		自由に時間を使い、経済力や体力に合わせて個別で余暇を過ごす	1	0	0
		自由に時間を使い、経済力や体力に合わせて個別で余暇を過ごす	0	0	2
計			100	32	64

も、農地保全のためにみんなでやろうって言うところすごく人が集まってくる。この地区（商業地区）でなにかやろうっていうとなかなか集まってくれないってことがある）

《旧来の隣組は互いに信頼してオープンな付き合い方だった》は、近所づきあいのサブカテゴリーとして抽出された。地理的に近いつながりとして、5軒から10軒の世帯を一組とした相互扶助の組織として隣組があり、戦時下には住民動員や物資の供出、統制物の配給、空襲での防空活動などを行ったとされる。町内会ともいうが、語り手は隣組と表現し、隣組では互いの家のことを何でも知っていて、自由に行き来できる関係であったという語りであった。

〈家を建てるとかっていうと、自分の組で足りないときはその隣、それでも足りないときはその隣から人が集まってくれて成り立っていたコミュニティだから、遠い親戚、近くの他人じゃ無いけど、やっぱり、近くの友人とか、隣近所とか話し合える人がいれば助け合って生活してきた〉

このような旧来のつながり方は、戦後の時代とともに変化してきていたことも《世代によって旧来の付き合い方と違う》としてサブカテゴリーが抽出された。

〈そっちの新しい通りっていうのはお互いにこう、守ろうって言う意識が強いついていうか。土地を守る意識が強いついていうか。こっちは隣に入り込んでも良いし〉

《地区の情報を掌握し信頼される立場の人がいた》は、助け合いや信頼に該当するサブカテゴリーであった。地区別に冠婚葬祭をはじめとする儀礼を取り仕切ったりする信頼される人とは、配下の家の事情を知り、連絡でき、何かあれば頼られる存在であったという語りであった。

〈昔の区長の役目で、自宅からお葬式を出したんですよ。で、お葬式を出すために、お葬式のやり方が宗派によって違うけども、あの家はなにに宗とか、だいたいこの区長って分かってたんですよ。そして何かあったときどこにいるどなたに知らせれば良いかっていう個人情報みたいなものほとんど持ってて〉

〈相談受ければ何でも協力してやろうっていうか。

100%は叶えられないけど、ここにすれば何でも出来る、なんでもやってあげるっていう思いの人がどっかにぼんぼんっていたんです〉

## 2) カテゴリー2【歴史的にヨソ者を受け入れてきた】

このカテゴリーはソーシャル・キャピタルの構成要素の地域の概念に該当し、町外から来た人たちを受け入れる風潮を形成している2つのサブカテゴリーが抽出された。「ヨソ者」という表現は、日本文化の特徴を著す書籍<sup>14)</sup>に基づいている。カテゴリー2に関する発言のほとんどはA氏により得られた。

《入植者と町をつくってきた》には、江戸時代の飢饉の影響や藩の領土争いに始まり、福島第一原子力発電所の誘致以降は、発電所自体は他町にあってもX町に作業員が集って住みつくる人がいたという語りであった。

〈昔、一時、人が、江戸末期くらいの飢饉のときに人がいなくなった地域、他から入ってくる人によって、またもう一回出来上がったような町なので、他から入ってきた人を拒むあれはないんですよ。だから、どなたが入っても入りやすい町っていうか、そういう町づくりなんで〉

〈X町って良いところだっただけでは、わざわざ住所を持ってきて就職したりはしない。だいたいそこで、誰かと関わったことによって、「あ、X町いいな」って思ってくれたと思う〉

こうした受け入れる風潮は、《他県から来た人を町の一員として受け入れる》という復興もありだとする考え方につながる。

〈ここの復興は人が住むこと。住めるようになること、立ち寄ってくれるようになることが復興だと思ってるんだけど。作業員の方がいっぱい入ってきてくれる。だからそういう人たちと町づくりすればいいっていうことなんで。他から来る人にいっぱい期待して。そのそういう町作りが可能な町って、まだまだ出来る町〉

## 3) カテゴリー3【基本的に地域への愛着がある】

このカテゴリーは、地域への思いや愛着、問題意識の持ち方などの地域の概念に該当し、4つのサブカテゴリーから導かれた。

《居住者は地域への愛着がある》にみるように地

域への愛着があって戻ってきたという。

〈そもそも何も無くても戻ってくる人は戻ってくるのよ、やっぱり。好きだから、ここが〉

〈みなさんそれは、ここなにもないけども、好きだから戻ってきてるって〉

〈なんで戻ってきたんですかって、愛着が強かったから戻ってきたって言うね〉

《町のために何とかしたいと思っている》は愛着によって裏付けられる。

〈X町の魅力は人だっていう人がけっこういたんだよね。それは面白い人だったり、本気になって町を何とかしようって思ってる人とかね。まあ、戻ってきた人たちはエネルギーな人だから、いろんな活動を、自分たちで作るの。集まって、何かするとかってね〉

《地域に愛着があっても戻れない人たちがいる》は、加齢による身体機能の低下や、雇用がないこと、避難先に生活基盤ができたことなど、戻らない理由がそれぞれあっても、その人たちの愛着を否定しない語りであった。

〈やはり土地に対する愛着でみなさん戻ってきたんだけど、放射能が強いからとか、隣に誰もいないからとか。不便だって言うのは、それはなんかこう、戻らないための理由づけになって〉

《戻らない人には放射線が理由になる》は、戻らない人たちが放射線を理由にする場合があり、その人たちが放射線への心配を払拭できていないことは理解していても、住民内部からの風評をつくりだしているといった思いが語られた。

〈風評被害って言うけど、それって被災者自身と、福島県の報道機関が作ってると思ってる。ここにいて怖くないんですから始まって、それを聞き出そうとする。X町で作った野菜、誰も食わないよとか。別なとこに家があるX町の人がそういう意見を出す。首都圏とかの中学生が研修に来るようになって。来ないのが福島県の子どもたちって言うか、避難先にいったX町の親は絶対X町には（子どもを）入れないって〉

4) カテゴリー4【居住者がつながる集会ができています】  
現状の居住者の人とのつながり方に関するカテ

グリーで、3つのサブカテゴリーが抽出された。カテゴリー4に関しては、A氏B氏C氏それぞれの発言があった。

サロンなどの《複数の交流の会につながりができている》には、さまざまな交流の会を通じて知り合い、自発的な会も発足するなど、会う機会が増え、絆になりつつあるという内容の語りであった。

〈仮設ってすごい人数がいたので、知らない者同士なんですけど、そこで、X町っていうので繋がってますので、そこでお友達になってまたみんなで戻ってきたっていうケースもありますね〉

〈一軒家に帰ってくるってすごくさみしいことで、そこでいろんなサロンに出て友達になった人がまた絆が強いんですよ。隣近所誰もいないところに帰ってきたんだけど、いろんなサロンに参加して、顔見知りになって、友達が出来て、さらに震災前より濃い付き合いが出来るって言う、そういう風に言ってる方もいらっしゃいます〉

このような絆が発展し、《居住者同士が知り合った先に気遣い気配りが生まれる》の例として、次に示す。

〈帰ってきた人の名前を覚えるってことは、話しかけるってことなんで、話しかければ大丈夫なんで、その人を互いに知るので、その先に気遣いができる〉

〈復興公営住宅に戻ってきたお年寄りの人たちが、いろいろ野菜を作ったり、漬け物を作ったり、お総菜を作ったりしてんですね。で、それは同じく復興公営住宅に戻ってきて困ってる人のために作ってる〉

《信頼や人とのつながり方に個人の選択がある》では、集まりに参加しない人たちへの理解と心配が語られていた。

〈色んなサロンやってるんだけど、そのサロンに引っ張り出すために一生懸命やるんだけど、それもちょっと無理なときには、だれか、私が繋がってあげようって気持ちの人が一人でもいれば。その人に共有してくれる人が誰かはいるはずなんで。すべての人を無下に拒むってことはないと思うんで。あっちもだれかを期待してるかもしれないし。みんなのいるところには、あまり出たくないけども、誰かこう、茶飲み話しすんなら

いいやって思ってるかもしれなし。その辺を見極めて繋がっていけば、孤立化して防げるんじゃないかなって)

〈孤立化の問題も、誰かと繋がっていると孤立じゃないんだよ。1人ぼつんという孤立が一番深刻な問題なんですけど。声掛けによって、出てこなかった人が出てくるっていうところまではいかないです。そもそも、そういうのが嫌いな人なのでね)

## VI. 考察

### 1. 旧来の人とのつながり方と互酬性について

カテゴリー1は、旧来のX町の人々が、地理的に近い人たちによる信頼の下で密接に関係し、互助という協力関係で成り立つ関係性でつながっていたことを示すカテゴリーで、X町に限らず、日本旧来の人とのつながり方の特徴である。すなわち、隣人同士は、何でも互いに知っていて、小銭の貸し借り、留守の見張りというような、相互に助け合う関係であった<sup>15)</sup>とされている。このような人とのつながり方は、携帯電話はもちろん、電話もなかった時代のコミュニケーションが対面を基本としており、地理的に近いところで頻繁に会い、身内のような協力関係から成り立つコミュニティであったと推察できる。したがって、日本の高齢者に引き継がれてきた社会的ネットワークの特徴と考えられる。こういうつながり方を話すのは、語り手自身が高齢、もしくはそれに近い人たちで、特にA氏が地域住民をまとめる重要な立場の人であることにもよるだろう。戦後の近所づきあいの変容、若い人たちのプライバシー重視の考え方を考慮しても、夫婦、親、子から成る3世代同居の割合が多かった<sup>16)</sup>X町の特徴として、地理的な近さでもって人とのつながりが堅固で、リスクヘッジが整い、相互扶助の体制が保持されていたとみることができる。

ソーシャル・キャピタルの重要な要素である互酬性とは、相互依存的な利益交換であり、相互期待が基にある<sup>18)</sup>。すなわち、贈与／返礼の原則(義務)のことで、返礼には、相手からの感謝の言葉や経験から得る自己実現、満足感などの形として目には見えないものや、ボランティアを受けた人が次の被災地にボランティアとして支援に行く「恩返し」<sup>18)</sup>の返礼などがある。協力者の語りを参照すると「助け合い」なので互助に近く、近年の地域包括ケアシステムで推奨されている互助の精神は、自発的なイベ

ントの活性化につながり、コミュニティ復興に寄与する資源になりうると考えられる。

### 2. ヨソ者を受け入れることと地域への愛着の共存

日本における旧来の人間関係では、イエ、同族、派閥などにみる所属集団の利益を重要視し、ウチとヨソの区別が明瞭で、なかなかヨソ者を受け入れにくかったとされる<sup>14)</sup>。ソーシャル・キャピタルの概念からも、強力な結合型ソーシャル・キャピタルが持つ負の側面として、内在する排他性の危険性が指摘されている<sup>17)</sup>。しかし、江戸末期に始まる、ヨソから来た人を排除しない特性は、原子力発電所誘致後の作業員や、避難指示解除後の県内外からの支援団体、農業を含む起業などヨソ者を多く受け入れ、そのうちにX町に居住するようになった人もいて、引き継がれている。現在の日本では、多文化を尊重した活力ある共生社会を目指すまでになっているが、旧来から人を信じ、受け入れる町の人たちの人柄が、外から入る者にとっての居心地の良さに繋がって増えていくとすれば、コミュニティ復興に有用な資源であると考えられる。

地域への愛着形成は、地域に対する肯定的な認知から地域に対する肯定的な印象を形成し、その印象が愛着を形成すること、そして、地域への愛着形成には居住年数よりも集団に対する肯定的な印象が大きな影響を与える<sup>19)</sup>ことが明らかにされており、地域とそこに居住する人への好ましさによって愛着が堅固になるといえる。

信頼や愛着が強いことも排他性につながりやすいように思われるが、前述のヨソ者を排除しないことと共存してきたことが、ヨソからきた人も含めた復興に抵抗がない点で、コミュニティ復興には強みとなることだろう。

### 3. 会って交流して仲間としてのコミュニティ形成へ

カテゴリー4は、現状の居住者の人とのつながり方を示す内容であった。持っていたソーシャル・キャピタルがどのように活用されているかを示す内容でもある。

X町ホームページによれば、居住者には高齢者が多いこと他に、自主自発的なサロンやサークルが複数できている。帰還後は近所に居住者が少ないという現状があるなかで、社会参加の機会が複数用意されている。高齢者を対象とするサロンやサークル

への参加を通して仲間のコミュニティができつつあるのだが、それは旧来の地理的な近さのコミュニティ形成が望めない場合の代替方法と考えられる。このような繋がりには水平的なネットワークである。会社組織などの垂直的なネットワークがどんなに密であったとしても社会的信頼や協力を維持することはできないが、水平的ネットワークが密になるほど相互利益に向けた協力を得るとされる<sup>17)</sup>。本来の近所づきあいがたとえ持たなくても、イベントに参加して仲間になると信頼や協力につながり、共同で何かに取り組む素地となっているといえよう。携帯電話やスマートフォンで人と容易につながる時代となったいまではそれも併用しつつも、頻繁に会ってよく知り合うことがやはり重要なのだと考えられる。

さらに、こうした絆ができれば、自分たちが良ければそれで終わりではなく、支援する人たちや自発的に参加している人たちは、参加しない人たちが孤立して困っているのではないかと心配し、昔ながらのお裾分けが行われている。孤独は主観であり、孤立はほかの人から見て家族やコミュニティと接触がないことだ<sup>20)</sup>とされるが、誰か一人でも繋がれる人がいれば、孤立を防ぐ手立てにはなる。支援者の訪問を受け入れない方々へも、本人が求めないからと終わるのではなく、相手の思いを尊重しつつも、時間と労力を惜しまずにつながり続けるのが重要と考えられる。

地域のソーシャル・キャピタルは、歴史・文化の要因によって形成される部分がかなりを占め、長期にわたって安定している可能性がある<sup>17)</sup>と経済協力開発機構 OECD (Organization for Economic Cooperation and Development) が示しているように、本研究において抽出されたソーシャル・キャピタルが、長い歴史の中で継承してきた文化や行動規範の産物であるということを再確認できた。そして、一旦崩壊したコミュニティを復興させるにあたって当該地域のソーシャル・キャピタルを活用することは、住民にとって無理のない復興を期待できると考えられる。

## VII. 本研究の限界

X 町という 1 自治体の 3 人の協力者によるデータであり、A 町での活用に限られる。ただし、放射線が原因ではないが、高齢化・過疎化が進む地域では

共通するソーシャル・キャピタルが得られる可能性がある。

## VIII. 結論

本研究では、X 町の住民を支援する立場の 3 名の語りから、ソーシャル・キャピタルとして以下のカテゴリーを抽出し、コミュニティ復興への活用について考察した。

1. 【旧来は行政区、班、隣組のつながりで密着していた】は、近いところで助け合ってきた日本旧来の人とのつながり方であり、高齢世代が多い地域で互助の精神は強みとなる。
2. 【歴史的にヨソ者を受け入れてきた】【基本的に地域への愛着がある】の共存は、強い密着や愛着による排他性を生じさせることなく相補の関係となって、コミュニティ復興の強みとなっている。
3. 【居住者がつながる集会ができています】は水平的ネットワークが強化され、住民目線の住民でつくる住民のためのコミュニティ復興につながっている。

## 謝辞

本研究に御協力くださった X 町役場の職員と 3 名の御協力者に厚く御礼申し上げます。本研究は、本学の卒業研究として調査したものを再分析、考察しました。調査に協力してくれた狩野千遥さんに感謝します。

## 研究助成

本研究はどの機関からも研究助成を受けていません。

## 利益相反

本研究における利益相反はございません。

## 引用文献

- 1) 本橋 豊, 金子善博, 藤田幸司. 高齢者の社会的孤立と自殺, 自殺予防対策. 老年精神医学雑誌. 2011, 22. 672-677.
- 2) 朝日新聞デジタル. 震災の仮設住宅 5 年間で 190 人が「孤独死」(掲載日 2016. 2. 18) (検索日 2019. 12. 23) <https://www.asahi.com/articles/ASJ2L354YJ2LUBQU00N.html>
- 3) 朝日新聞デジタル. 復興住宅での孤独死が急増 昨年 68 人入居後に孤立か (掲載日 2019. 3. 11) (検索日 2019. 12. 23) <https://www.asahi.com/articles/ASM373DTSM37UNHB002.html>
- 4) 河北新報. 福島・避難解除 9 区域/居住率 23.2%



- 止まり／高齢者 6割超の地区も（掲載日 2019. 4. 12）（検索日 2019. 12. 22）[https://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201904/20190412\\_63016.html](https://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201904/20190412_63016.html)
- 5) 福島民友新聞. 町職中心に「分断」組織 帰還者多くは高齢者現役世代少なく（掲載日 2018. 12. 11）（検索日 2019. 12. 22）<https://www.asahi.com/articles/ASJ2L354YJ2LUBQU00N.HTML>.
  - 6) Aldrich DP. Building Resilience: Social Capital in Post-Disaster Recovery. University of Chicago Press, Chicago, 2012. (石田 祐, 藤澤由和. 災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か：地域再建とレジリエンスの構築. ミネルヴァ書房, 東京, 2015. pp. 6-9)
  - 7) 厚生労働省. ソーシャルキャピタル関連資料（検索日 2020. 3. 17）<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakuni tsuite/bunya/0000092042.html>
  - 8) 厚生労働省. ソーシャルキャピタルを活用した地域保健対策の推進について（検索日 2020. 3. 17）
  - 9) 厚生労働省. 地域保健におけるソーシャルキャピタルの活用等について（2015. 7. 22）（検索日 2020. 3. 21）<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10900000-Kenkoukyoku/0000092146.pdf>
  - 10) 内閣府. 平成 14 年度ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて 調査結果の概要. ソーシャル・キャピタルという新しい概念（検索日 2020. 3. 21）<https://www.npo-home page.go.jp/toukei/2009izen-chousa/2009izen-sonota/2002social-capital>.
  - 11) Putnam, RD, Leonardi R, Nanetti R. Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy. Princeton University Press, Princeton, 1992. (河田潤一訳. 哲学する民主主義：伝統と改革の市民的構造. NTT 出版, 東京, 2001. p. 318) <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/0000174310.pdf>
  - 12) 平成 24～26 年度日本地域看護学会地域看護学学術委員会. 地域看護学の定義について. 日本地域看護学会誌. 2014, 17(2). 75-84.
  - 13) 河原田真理子, 本田 光, 田仲里江, 他. 地域保健活動の推進に活用できるソーシャル・キャピタル測定尺度の開発. 日本公衆衛生看護学会誌. 2017, 6(2). 132-140.
  - 14) 中根千枝. タテ社会の人間関係単一社会の理論. 講談社, 東京, 1967. pp. 29-64.
  - 15) 島田一郎. 近隣社会の人間関係. (有)プレーン出版, 東京, 1985. pp. 37-40.
  - 16) X 町人口ビジョン（検索日 2020. 3. 22）<https://www.town.namie.fukushima.jp/uploaded/attachment/4774.pdf>
  - 17) 田所聖志. 地域包括ケアにおける「互助」概念と贈与のパラドックス：互酬性を手がかりに. 日本健康学会誌. 2018, 84(6). 187-197.
  - 18) 菅 磨志保. 日本における災害ボランティア活動の論理と活動展開：「ボランティア元年」から 15 年後の現状と課題. 社会安全学研究. 2011, 創刊号 (1). 55-66.
  - 19) 引地博之, 青木俊明. 地域に対する愛着形成の心理過程の検討. 景観・デザイン研究講演集. 2005, 1. 232-235.
  - 20) 山崎久美子, 逸見 功. 孤独死研究の動向と今後の課題. 日本保健医療行動科学会誌. 2017, 32(1). 66-73.